

加茂中学校区	校番 39	福山市立加茂中学校
最終更新日		2026 年（令和 8 年）2 月 18 日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 資質・能力	課題発見・解決力 コミュニケーション力 あきらめない心
○地域と小中学校が日常的に連携を取り、9年間を見通した系統性・継続性のある加茂・山野・広瀬でのふらさと学習の内容を検討し、進めていくことが大切である。	○「地域について語れる」児童・生徒を育てるための定期的な学習を展開して欲しい。地域の側では、協力してくれる人材を発掘します。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	学びを楽しむ・学びを活かす子ども 夢を語れる・自分のことを語れる子ども
○「地域について語れる」児童・生徒を育てるための定期的な学習を展開して欲しい。地域の側では、協力してくれる人材を発掘します。	○問いに対する自分の考えを、文章にしていくことに課題がある。	中学校区として統一した取組等	①幼保小中連携 子ども・教職員の交流を通して、幼児期から小中学校までの学びをつなぐ「幼保小・小中・幼保中」連携した教育活動の実践 ②地域とともにある学校 CSを導入し、学校・家庭・地域が連携した教育活動の充実を図る地域素材を活用した教育活動の実践

III 自 校

ミッション	育成する力 資質・能力	課題発見・解決力	コミュニケーション力	あきらめない心
加茂中学校で学んでよかった 加茂中学校へ通わせてよかった 加茂中学校で働けてよかった と思える学校	めざす子ども像	○現状を分析したり、新たに直面した事象を把握したりするなどして、課題を見出すことができる。 ○既習の知識・経験や他者の考えなどを、比較したり、関連付けたりしながら、解決への道筋を立てることができる。	○さまざまな表現方法で、自身の考えや思いを、自信を持って発信することができる。 ○他者の考えや思いに傾聴し、多様性を尊重することができる。 ○協働する中で、新しい価値観に気づいたり、互いに高め合う関係を築いたりすることができる。	○主体的に「やってみよう」という、高い意欲や好奇心を持っている。 ○仲間とともに、多様な方法を出し合い、試行錯誤しながら、何とかやり切ろうと課題に向き合っている。 ○最後まで、あきらめない、粘り強さがある。
学校教育目標				
ともに 学び合い 高め合う				
現 状				
＜生徒＞ ○生徒会執行部や委員長・リーダーを中心に、よりよい学校づくりに向けて、協力したり支え合ったりする姿が見られる。 ○「主体的・対話的で深い学び」に係るアンケート結果がすべて市平均を上回っている。 △不登校生徒の割合が1割を超えている。 △「基礎・基本」の定着や、思考力・表現力が十分でない。 △自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表できる生徒が6割を下回っている。				
＜授業＞ ○話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりする生徒の割合が8割を超えており、対話を大切にした授業が増えている。 △疑問を引き出し解決する授業づくりをめざして研修を重ねているが、依然として教師主体の授業から抜け切れていない現状もある。				
	テーマ	疑問が生まれ、多様な学びを楽しめる授業づくり		
	内容等	○主体的・対話的で深い学びのある授業をつくるための教材研究と授業実践を繰り返す。 ○自分の授業を振り返り、見出した課題を解決するためのテーマを各自が設定し、他の教職員と対話・協働しながら探究する。		
	めざす授業の姿	○生徒達が、ともに学び合い、高め合うことで、「？（なぜ・どうして）」が、「！（わかった・できた・なるほど）」になる授業 ○教師も生徒も、「おもしろい」と感じられる授業		

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立加茂中学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 付 評価	達 成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 付 評価	達 成 評価	総 合 評価	改善方策
1	【学力向上】 自ら学び、仲間 とともに、協働 して学習を創造 する子どもの育 成	★	新規・ 継続	○各学年で身に付け るべき力を確実に 定着させる。 ○教師自身の授業力 向上を図る。	○学期ごとに数値に 基づく、生徒の実態 把握を行い、改善・ 修正を重ねる。 ○全職員が年間1回 以上の授業公開を 行う。	○正答率4割未満の 生徒の割合を30% 以下にする。	□1学期調査の結果、5教科 正答率4割未満の生徒は、1年 25.3%、2年39.8%。校内研 修で協議し、学力補充と、5教 科で週末課題に取り組むこと とし、確実に実施している。 □18人中12人が授業公開 を実施。	3	3	○課題の工夫等 を行い、家庭学習の定 着に向けた取組を 進める。また、定期 テスト前等に、学力 補充を実施する。 ○授業を見合った 後に、改善策に係る 対話や肯定的な声 掛け等を行う。	□2月に週末課題取組強 化月間を行っている。提出 率は1年生92%で2年生は 100%である。 □18人中17人が授業公 開を実施している。残り1 人は3月に実施予定。 ◎2学期調査の結果、5教 科正答率4割未満の生徒 は、1年38.1%、2年 29.5%である。	4	3	3	○個別の探究活動を 設定し、学力向上に 向けての取組とす る。 ○師範となる先生の 授業を全員で参観す る校内研修を設定 し、授業力向上に努 める。
1	【不登校減少】 違いを認め、と もに高まり合う 集団の育成	★	新規	○不登校および不登 校傾向の生徒を減 少する。 ○新規の不登校生徒 を「0」にする。	○対策委員会での意 見やSCの助言等 を教職員で共有し、 支援を重ねる。 ○保護者・関係機関と の連携強化や、ほっ とルームの活用を 進める。	○不登校生徒の合計 人数、前年度比 80%未満。 ○安心した学校生活 が送れていると実 感する生徒90%以 上。(昨年94%)	□10月1日現在の不登校数 19人。前年同時期と同数で あるが、欠席日数50超の生 徒は、昨年度14人に対して 今年度は9人となっている。 □「安心した学校生活を送 れている」生徒の肯定的回答は 92.1%。目標は達成してい る。	3	3	○ほっとルームの 円滑な活用をす すめ、生徒との繋がり を大切に。 ○教員間の情報共 有、家庭連携を密に し、学校と家庭生活 が結び付く仕組み を整える。	◎2月1日現在の不登校 数23人。前年同時期30 人。前年度比76%であり、 目標を達成している。 ◎「安心した学校生活を送 れている」生徒の肯定的回 答は95.7%。目標は達成 している。	4	4	4	○ほっとルームから 教室に復帰する際の 段階的モデルや学力 保障のためのシス テムを構築する。 ○不登校未然防止に 取り組む。 ○心の健康観察を実 施する。
3	【地域創生】 地域とつなが り、地域の活性 化に貢献できる 学校づくりの推 進		継続	○地域に感謝し、貢 献しようとする子 どもを育成すると ともに、地域に喜ば れる教育活動を推 進する。	○地域の要望に応え たり、課題改善に努 めたりする活動や、 成果を地域に発信 する場などを通し て、貢献意識を実 感できるようにする。	○「地域のよさを語れ る」「地域に貢献し ている」と実感する 生徒90%以上。	□地域のよさを語る生徒 は63.4%。目標を達成でき ていないが、「地元愛をも つと深めたい」「地元のよさを 広めたい」などの自由記述が あり、地元への関心の高まり が見られる。	3	2	○地域でのボラン ティア活動や地域 の方にご協力いた だいての活動など、 地域の方と触れ合 う場の設定を継続 して行う。	◎地域のよさを語る生 徒は72.2%。目標は達成 できていない。 ◎地元への関心が高まり、 地域の方と接する場面で、 主体的な行動が増え、アド バイスを次の活動に活 かそうと姿が見られる。	4	2	3	○継続して、地域の 要望に応える活動を 実践する。体験活動 を通して、生徒の地 元への関心は高まっ ているため、地域素 材のすばらしさをよ り実感できる活動を 工夫する。

[プロセス評価の評価基準]

[達成評価の評価基準]

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。